公開講演会記録

祖父　大平正芳と中国
―現在、過去　そして未来へ……

元日本テレビプロデューサー　渡邊満子

大平に抱かれた私

２０１８年10月の日中首脳会談で両国は「競争から協調」の新たな段階に入った。遡ること46年……今日の日中関係の礎を築いた政治家のひとりであり、私にとって母方の祖父である大平正芳についていま一度考えてみたい。

大平正芳は明治末期の１９１０年、四国香川県の農家に生まれた。この年はハレー彗星が地球に接近し、日韓併合が行われ、大逆事件が起きた。多感な青春時代にキリスト教の信仰の道に入り、伝道師として生きていこうと決意したのだが、運命のいたずらで政治家となり、現職の総理大臣として亡くなった。享年70。

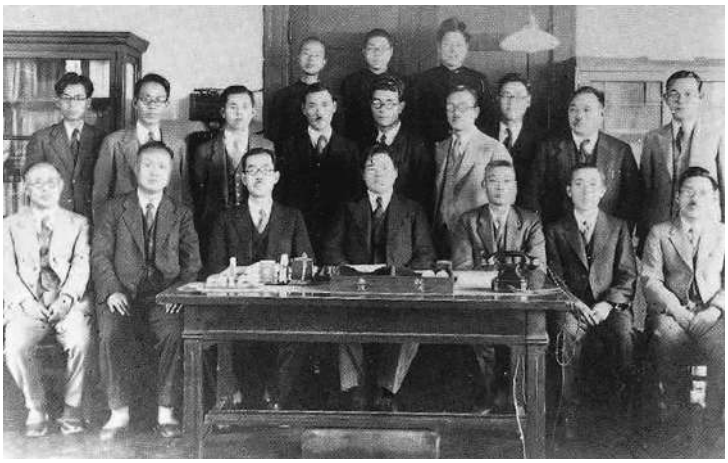
祖父がキリスト者として生きていこうと決意した時期は、第一次世界大戦と第二次世界大戦にはさまれた激動の時代で、19歳で洗礼をうけたのだが、20歳のときに、日本は昭和恐慌に見舞われた。

翌年には満州事変、23歳のときにヒトラーがドイツの政権を掌握し、日本は国際連盟を脱退。このような重苦しい時代に、東京商科大学に進学した。大学のゼミで大平は、中世の哲学者、聖トマスアクイナスの思想と運命的に出逢った。「人間は他者に助けられ、自らの豊かさを人々と分かち合う存在である。物質の豊かさには限界があるが、心の豊かさは人間にとって共通の目標となりうる……」。

大平は、読書をこよなく愛した。読むということは、それを書いた人に出会うこと……祖父は読書を通じて古今東西の歴史や哲学を寄せ木細工のように組み合わせて、独自の思想を育んでいったのである。１９３５年、大平は高等文官試験に合格し、郷里の先輩、津島寿一次官を大蔵省に訪ねて、大蔵省への入省が内定した。そして、入省の４年後の１９３９年に、興亜院の事務官として張家口に着任し、蒙古、また当時の満州の各地の視

察もした。

この時期に目の当たりにした、日本の軍部の横暴ぶりが、中国国民への贖罪意識につながったのだと思う。また、祖父はこの時期に人間を観る目を養ったようだ。日本人の中でも、軍に取り入ってその権限を利用することばかり考える人間と、本当に内蒙の将来を、日本の未来に視点を据えている人間がいることが見えてきたのだ。



興亜院蒙疆連絡部経済課長時代・張家口にて
（前列中央、昭和15年）（出典『大平正芳回想録 資料編』）

この中国大陸の経験により、中国は大陸国家であり、日本は海洋国家である……と、考えるようになった。また、日本人と中国人は、共通点より相違点の方が多く、何かにたとえるとすると、大晦日と元旦のようなものではないか……と、後に語っていた。つまり、隣り合ってはいるが、まったく違うという意味だと思う。だからこそ、仲よくしていくためには、努力が必要だという考え方だ。

敗戦直前の大平の言葉が残っている。親しい友人に語った言葉である。「日本が戦争に負けることは残念だが、今の日本のように軍部独走でもし勝ったとしたら恐ろしい世の中になるだろう、そしてそのような日本は早い時期に倒れる日が来るのではないか…」。

祖父は終戦の前後の大蔵大臣をつとめた、津島寿一大臣の秘書官だったので、津島さんを通じて情況を把握していたのだと思う。仕事の鬼、怖い人として、大蔵省の関係者のうちで伝説となっている津島寿一が、終戦後のある日大臣室でひとりハラハラと涙をこぼし、泣かれていたそうだ。秘書官の大平が「大臣、どうなさったのですか」というと、津島さんは「実は明日から国民に対する食糧の備

飛行機の中での写真（周恩来と３人）

蓄も尽きたんだよ…」と……。

自分を大蔵省に採用してくれた、同郷の恩人が悲歎にくれる姿にふれて、大平はどんなにか心を動かされただろうか。戦争という〝悪〟、戦争体験こそが、政治家、大平正芳の原点だと私は考える。

政治家となった大平が、ずっと考え続けていたこと、それが、中国との国交正常化だった。１９７２年７月、田中内閣が成立。いよいよそのときがやってきた。しかしながら、田中総理は必ずしも積極的ではなかった。何故なら、党内外の猛反発に加え、各方面からの脅しも多々あったからだ。もしこれに失敗をしたら、退陣……たったの２か月で退陣とは……。「絶対に成功させてみせる！　俺にまかせろ……」。大平は田中総理の背中を押した。毎日のように、他の外務省幹部は抜きで橋本課長と協議を重ね、夜は料亭で、古井喜実さんとの打ち合せを行った。そしていよいよ９月25日に北京へ出発。厳しい交渉を経て、なんとか調印にこぎつけた。

９月30日、上海から帰国。帰りの飛行機の中で、大平はつぶやいた。「今は両国ともお祭りさわぎだが、30年後、中国が経済成長を成し遂げたときには、新たな問題が起こるだろう……」と……そして、その予言は、的中したのだ。

本年五月、李克強首相の来日に伴い、日中平和友好条約締結時に尽力した方々とその家族が招かれ、お目にかからせていただく機会を得た。

この日、私は祖母、大平志げ子の生前大切にしていたきものを着て出かけた。この写真で私の隣（前列右から３人目）におられる方が、現在、中国人民対外友好協会会長をされている李小林女史だ。李女史は、１９５３年、湖南省生まれで、故李先念元国家主席の娘で、習近平国家主席の幼馴染みだという。アメリカ留学のご経験もあり、英語が堪能なので、中国語の苦手な私も親しくお話ができた。「私が今回の訪問団のスポンサーなのよ！」と語ってくれたのだが、日本人女性にはなかなか見つけられない、凛として、さわやかな自信に満ちあふれた女性だった。

李克強さんとの写真

昨年の夏、『文藝春秋』誌にある中国人女性について書かせていただく機会があった。それは李徳全という、戦後、中国国内に抑留されていた日本人戦犯名簿を、戦後初の訪中団の団長としてもたらした女性についての記事だった。以下、そのときに書いたものを引用したい。

終戦から72年秘話開封！
ＢＣ級戦犯を帰国させた中国の女傑
戦犯名簿を日本にもたらした李徳全の足跡を辿る

一九五四年十月三十日夕刻、終戦後国交がなく〝竹のカーテン〟に覆われていた中華人民共和国から、日本への初の使者が羽田空港に降り立った。黒いオーバー

コートに、焦げ茶色の中国服を身に纏った李徳全（58）である。彼女がタラップの上に姿を現すと、「ワアーッ」という歓声が巻き起こった。打ち振る小旗が一斉にざわめき、フラッシュの光の束と共に、自然と拍手が起こった。

中国共産党赤十字訪日代表団の団長を務めていた李女史は、当時周恩来政権の衛生部長、日本では厚生労働大臣にあたる役職を務めていた。中国紅十字会（日本でいう赤十字社）の会長でもある。副団長の廖承志氏は、日本生まれの日本育ちで、日本語はペラペラ。毛沢東から「半分は日本人だから」と言われたほどの知日家だ。

総勢十名の代表団は十四日間の日程で、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸の六都市を訪問した。彼らの最大の目的は、中国国内に抑留されていた、所謂BC級戦犯の名簿を日本側に渡すこと。そして、彼らの帰還を促すことであった。

当時の日本は台湾と国交を持っており、中国を国として承認していなかった。そのため現地に残された居留民の引き揚げには中国共産党の許可が必要であった。徐々に一般人に関しては引き揚げが進められていたが、収監されていたBC級戦犯については、生死も分からない状況が続いていたのだ。そのため、李女史の代表団は、戦犯の留守家族を始めとする関係者から期待を持って受け入れられた。

羽田空港は出迎えた日本人で立錐の余地なく、空港の外にも三千人あまりが集まっていたというから、当時の人々の歓迎ぶりがよくわかる。だが、いまの日本で李女史のことを覚えている人がどれだけいるだろうか。実は中国でも、李女史がキリスト教徒であるなどの理由で、その存在は近年まで省みられていなかったのだ。

私が李女史のことを知ったのは偶然だった。

私は以前、日本テレビで番組制作に携わっていたが、いつか日中戦争に翻弄された人々の姿を取り上げたいと思っていた。それは私の母方の祖父・大平正芳の影響が大きい。

大平は一九七二年九月、外相として田中角栄首相とともに中国を訪問、日中国交正常化を実現させた。中国側の相手は奇しくも李女史が来日したときの総理と同じ、周恩来であった。

日中国交回復は、大平が政治家になった当初からの悲願であった。大平は大蔵官僚だった一九三九年、中国の張家口に一年半ほど単身赴任していた。その際に日本の軍部の横暴な振る舞いを目にし、また阿片売買の予算管理という職務に就いていたことで、中国の人々への贖罪意識を芽生えさせたという。

幼いころから中国という存在を身近に感じていた私は二〇〇八年、北京オリンピックの年に『女たちの中国』と題した特別番組を企画した。李香蘭や川島芳子など、日中の歴史で翻弄された女性たちを描いた作品だ。そして、その制作の過程で知り合った研究者の方に、李女史の存在を教えてもらったのである。戦後間もない激動の中国において、政治の中枢で活躍した女性がいた。その事実に惹き付けられ、取材を進めるうちに、彼女に関わった日本人にめぐりあうことができた。

本稿では、李女史の活動と接点のあった人々の視点から、彼女が日本に何をも

たらしたかを、浮き彫りにしたい。

待ちわびていた戦犯家族

「李徳全という名前は、我が家にとって忘れることのできないお名前です」

こう語るのは桑田冨美子（80）。一九二八年、奉天近郊の線路上で起きた張作霖の爆殺事件の首謀者とされる河本大作元陸軍大佐の孫である。

事件後、河本は南満州鉄道の理事や満州炭鉱の理事長を経て、国策会社山西産業株式会社の社長に就任。戦後、山西産業は中華民国政府に接収されるが、引き続き河本は同社の最高顧問として経営を任されていた。しかし一九四九年、中国共産党軍の捕虜となり、太原収容所に収監されたのだった。

それゆえ河本の家族は、李女史の訪日を待ちわびていた。

到着当日、李女史率いる代表団は、羽田を出ると宿舎の帝国ホテルへ。ホテル前では約二千人もの中国人男女が「歓迎祖国紅十字会代表」と記された大きな旗を振り、熱狂的な歓声をあげていた。

すぐに廖副団長が会見を行ない、「戦犯のうち非常に大部分のものが寛大な処置を受ける」「（戦犯への連絡は）日赤から中共紅十字を通じて戦犯に届くようにする。小包などの差し入れも結構だ」と明言。歓迎夕食会の席上で李女史は次のように述べた。

「赤十字の人道主義的精神と平和を守る運動は全く一致している。私は平和を守り戦争反対に努力している日本人民に感謝する。日本人の帰国と戦犯問題については中国紅十字会としてできるだけの世話と援助をしたい」

小柄でふくよかな李徳全女史は、終始微笑みを浮かべ、歓迎に応えた。

戦犯の家族たちの期待は、否応無しに高まっていた。

翌日、代表団は芝公園にある日本赤十字社を訪れた。李女史は車から降りると、待ち構えていた島津忠承日本赤十字社長と固い握手を交わす。そして「わざわざお招きありがとう」と挨拶し、戦犯名簿を手渡した。

名簿は二冊に分かれており、「日本侵華戦争罪犯名冊」には生存者千六十八名の、「同死亡者名冊」には死亡者四十名の名前、部隊名、階級、年齢、出身地などが詳細に記載されていた。またその後の懇談で、戦犯の大部分と帰国を希望する一般人二千人は年内もしくは来春までに帰国させることが発表された。

日本赤十字の講堂には約七百人もの留守家族が詰め掛けた。引き渡された名簿は次々と講堂に送られ、係員が読み上げていく。集まった家族たちは肉親の名前がないかと耳をそばだて、名前を読み上げられた家族がいると全員が拍手をして喜びをともにしていた。李女史も姿を見せた。元満州国総務長官武部六蔵の孫・河本春子を抱きかかえて頬ずりをし、熱狂的な拍手が送られるシーンもあったという。

だが喜びに沸く家族が多くいた一方、死亡と発表され、悲しみに暮れた家族もいた。その四十名のうちの一人が河本元大佐であった。桑田が言う。

「来日前の紅十字会からの情報では、祖父は収容所で無事で生きているとのことでした。そこで母たち姉妹は、『どうか無事に日本に帰して欲しい……』という主旨の手紙を李徳全さん宛に出していたのです」

一九四八年までは「元気でいる」との便りがあり、その後もかつての同僚が北京にいて、ときどき差し入れをしてくれていたのだという。

「だから代表団の来日で、祖父が日本に帰ってくる日がはっきりするものだと楽しみにしていたので、あの日、前年の八月二十五日に亡くなっていたことを知っ

て、家族みんなでとてもがっかりしたことを覚えています」

死因は「心臓衰弱」。詳細は不明。名簿一つで肉親が亡くなったことを知る家族の心中はいかばかりだっただろうか。ただ翌年の暮れ、急に遺骨が日本に届いた。

「いきなり役所から舞鶴に遺骨が届いているから取りに来てくださいと連絡があったのです。特例的なことなので手紙を読んだ李徳全さんの計らいだという人もいました。いずれにせよ家族としてはありがたかった」

桑田の思い出の中の河本元大佐は〝優しいおじいちゃん〟だったという。

「祖父は仕事が多忙でたまにしか会えなかったのですが、長身に白い麻のスーツを着て、庭の広い芝生で私たちと遊んでくれました。〝事件〟のことを知ったのは引き揚げた後です。祖父の別の顔を見た気がしました。何があんな行動に駆り立てたのか。『勝つことが国のため』と教え込んできた教育が問題なのではないかと考えるようになりました」

桑田はいま児童文学研究家として、平和を題材にした絵本の翻訳、展覧会に関わっている。

〝流転の王妃〟との縁

李女史の来日に際し、政権末期にあった吉田茂首相は、まるで接触をさけるかのように訪米日程を組み込んでいた。長い間、外交活動に従事してきた吉田茂のバランス感覚からすると、中国とはなるべく交流を少なくすることこそが、日本の早期の主権回復につながると考えていたのだろう。

代わって代表団と面会したのは、三笠宮崇仁殿下や高松宮妃喜久子さまらである。十一月三日、旧高松宮邸・光輪閣で日本赤十字のお茶会が催され、代表団と面会した。その際には、「三笠宮と高松宮妃は日本軍が中国で起こした戦争について後悔とお詫びの念を伝え、日中両国の友好促進に尽力するよう希望した」という（『李徳全―日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性』程麻・林振江著）。

三笠宮・高松宮はともに日本赤十字の名誉副総裁であり、海外在留日本人や捕虜の帰国などの慈善事業を、熱心に行っていた。

満州国の〝ラストエンペラー〟愛新覚羅溥儀とその弟、溥傑も当時、消息が分からなくなっていたうちの二人であった。溥儀や溥傑ら満州帝国宮中一行は、日本への亡命途中に、ソ連軍の捕虜となる。ソ連極東部のチタとハバロフスクの強制収容所に収監され、溥儀は極東国際軍事裁判にもソ連の証人として出廷させられた。

そして、一九五〇年、中国に身柄を移送される。満州国の戦犯として、撫順の政治犯収容所に弟の溥傑らとともに収監されてしまった。一時、ハルピンの政治犯収容所に移動するも、一九五四年には再び撫順の政治犯収容所に戻っていた。かつて絢爛豪華な紫禁城で暮らした皇帝とその弟の収容所での生活は厳しいものだった。

二人がどこにいるのか、日本に帰国していた家族は引き揚げ者の情報からしか得る術はなかった。

後に〝流転の王妃〟と呼ばれた溥傑の妻・浩は、一年四カ月に渡り中国大陸を転々とした末一九四七年に帰国。一度だけ一九五一年にソ連の赤十字社から夫の手紙が届くが、その後は再び音信不通に。浩は二人の娘を育てながら、ひたすら夫の無事を祈り続けていた。

そして一九五四年九月、李女史らの代表団が来日する直前、日本赤十字社経由で溥傑から手紙が届いた。消印には「中国　撫順」と記されていた。次女の福永

嫣生（77）が語る。「いまは撫順にいること、元気で変わりないから心配するなという父からの手紙でした。驚いたのが、手紙が書けるようになったのは私の姉の慧生のおかげだと書かれていたことです。『慧生の手紙を周首相がお読みになり、私に届けてくださった。とても立派な中国文だと、首相も感心しておられたと聞いている』と。姉は家族の誰にも相談せず、周恩来首相に手紙を出し、それが首相の目に止まり、赤十字社を通じて父と私たち家族との文通が許されたのです」

なぜいきなり周恩来が文通を認めたのか。もちろん手紙に書かれている通り、慧生の手紙に心を打たれたということもあるかもしれない。だが李女史ら中国紅十字会の代表団が、この時期に訪日したことも関係あるだろう。実際に浩は、来日した李女史に会いに行っている。

「母が宿舎をお訪ねして父のことを聞いたようです。手紙でやりとりはしていても、父がどのような生活を送っているのか、こちらではよくわからなかったものですから。とても優しい方で、丁寧にご対応してくださったようです」

この後、溥傑と浩ら家族との間で交わされた手紙の中にも、たびたび李女史の名前が見受けられる。「手紙写真と食料等、李徳全女史にたのんで下さいましたから、やがてお手元へ行く事と思います」（一九五六年十月十日、浩から溥傑への手紙）、「李徳全女史も近々来日されます」（一九五七年八月二十四日、浩から溥傑への手紙）。

一九五七年の二度目の来日の際にも浩は李女史を訪ねている。

六年間、およそ二百通に及ぶ文通の末、模範囚として釈放された溥傑と家族は一九六一年、再会を果たすことになる。

〈中略〉

李女史は、モンゴル族の貧しい家庭に生まれた。父親は力仕事で家族を養い、李女史も早くから家族の世話を任されていた。父がキリスト教を信仰するようになった影響で、彼女も三歳の時に洗礼を受けた。最愛の姉と妹を相次いで病気で亡くすという出来事も経験した。教会が運営する学校に通い、卒業後も教会の教育事業活動を行った。結婚相手も〝クリスチャン・ジェネラル〟と呼ばれた軍人・馮玉祥であった。抗日戦争期には、孫文夫人の宋慶齢と共に、戦地の児童を受け入れる施設もつくった。

これらの活動が認められ、一九四九年に〝新中国〟が誕生した際に衛生部長に任ぜられ、中国紅十字会の会長も務めることになったのだ。そして引き揚げ者の日本への送還に尽力し、代表団の団長にも選ばれた。

〈中略〉

ただ冒頭でも触れたとおり、キリスト教徒で、来日当時の彼女は共産党員ではなかった（後に入党）。そのため、これだけのことを成し遂げたにもかかわらず、中国国内でその功績が広く知られることは殆どなかったのだ。

王効賢さんの写真　中国留学生を瀬田の自邸に招いて記念の植樹（昭和59年11月11日）（出典『大平志げ子夫人を偲ぶ』）

〈中略〉

李女史は晩年まで紅十字会の会長として精力的に活動し、日中国交正常化の直前、一九七二年四月に亡くなった［享年72］。現在は、北京八宝山にある革命烈士の廟に祀られている。

〈『文藝春秋』２０１７年９月号より〉

戦争の世紀を生き抜いた女性、大きな志と実行力を持った女性、李徳全の存在を私たち日本人は忘れてはいけないと思う。

国交正常化の直前に天に召された李徳全女史……初来日当時、学生だったにもかかわらず通訳に抜擢されて来日した王効賢女史は、まるで李女史の遺志を継ぐかのように、１９７２年の国交正常化交渉でも通訳を務め、その後は中日友好協会の重鎮として活躍した。祖母の大平志げ子、母、森田芳子と共に私も親しくお付き合いをさせていただいた。

このたび、拙著『祖父　大平正芳』（中央公論社刊）が、中国語版として、社会科学文献出版社より出版され、久しぶりに北京を訪問した。中国社会科学院の関係者、学者さん等に祖父についての講演をさせていただいた。この中国版の前書きに私は次のように記した。

この本は、政治家とその政治家を支える家族の〝愛と哀しみ〟を、孫娘である私が〝女性の視点〟で描いた本です。

私が初めて出会った中国人女性は、国交正常化の時に両国首脳の通訳をされた王効賢さんです。王女史の初来日は１９５４年、戦後初の訪日団の団長をつとめた李徳全女史の通訳としての訪問でした。その後、１９７２年９月の国交正常化交渉にも通訳として活躍され、その後も中日友好に尽力され、大平家の私共も大変お世話になりました。私はこの本を尊敬する王効賢先生に捧げます。

女性の社会進出がいち早く成し遂げられた中国には、お手本にしたい女性が数多く活躍されています。２０１３年に開催した『日中未来の子ども１００人の写真展』に際しては、程永華大使夫人の汪婉女史が〝日中の子ども達が、幼い頃から出会える幸せ〟について、美しい日本語でスピーチをしていただき、一同感動の涙を流しました。このような女性同士の絆は、これからも両国の平和と友好の礎となることでしょう。

〈『外祖父　大平正芳』社会科学文献出版社刊より〉

現在、私は日中映画祭実行委員会というＮＰＯの副理事長として、映画による文化交流をしている。この団体は、中国に日本映画を日本に中国映画を紹介する団体で、両国の関係が冷え込んだときにも欠かさず交流を続けてきた。大平は、民間による分厚い交流こそが大切だと常々語っていた。私は、これからも日中の映画をはじめとする文化交流を軸として、戦争の世紀を生きた日中の女性たちについての研究も続けていきたいと考えている。

（２０１８年10月18日・公開アジア研究懇話会）

筆者略歴（わたなべ　みつこ）

１９６２年東京生まれ。
慶應義塾大学文学部仏文科卒業後、日本テレビ放送網株式会社入社、『キューピー３分クッキング』のディレクター、プロデューサーを20年余り担当。